# イスラーム陶器博物館

米　田　文　孝

エジプト・アラブ共和国の首都カイロには、多彩な収蔵品を誇る世界有数のエジプト考古博物館をはじめ、特徴的な数多くの博物館・美術館がある。その一つに、イスラーム陶器に特化して展示公開する「イスラーム陶器博物館（The Museum of Islamic Ceramics, Islamic Ceramic Museum）」がある。

イスラーム陶器博物館（1 Al Marsafi St. Zamalek）は、カイロ市内を南流するナイル川の中州にある。この中州（ゲズィーラ島）には文化センター（オペラハウス）をはじめとした政府関係施設や、各国の大使館などが集中している。行政区画上、ゲズィーラ島の北部はザマーレク地区と呼ばれるが、イスラーム陶器博物館はザマーレク地区を西北～東南方向に横断する幹線高架道路（7月26日通り）の東端、7月26日（シッタ・ウ・アシュリーン・ヨリヨ）橋の袂の南側にある。博物館の周囲は、1868年にスエズ運河の開通祝宴用として建築されたというゲズィーラ・パレスに由来するマリオットホテル（Marriott Hotel）をはじめ、伝統的景観が良好に保たれた環境である。

写真１　イスラーム陶器博物館の正面（南から）

図１　イスラーム陶器博物館の展示室
（AREMC1998より）

博物館として利用される建物は本来、オスマン帝国の属州エジプトの支配者（総督）でありながら半独立政権を樹立したムハンマド・アリー（Mohammad Ali）の孫の一人、アムル・イブラーヒーム（Amru Ibrahim）の宮殿としてヒジュラ暦1343年（西暦1924～25年）に建造されたものである。

その後、このイスラーム建築の壮麗さや豪華さを如実に伝えている歴史的建造物には、モハンマド・マフムード＝カリールとその妻が蒐集したコレクションが一時保管されていたが、ギザにある本来の展示施設（Mohamed Mahmoud Khalil & His Wife Museum）にコレクションを移管する議論が俎上に載せられたとき、エジプト政府はゲズィーラ芸術センターとして利用されていたこの宮殿を修理・改築し、イスラーム陶器博物館として開館することに決した（写真１）。

このイスラーム陶器博物館（約870㎡）の周囲には、現代美術の展示がある幾何学的に植栽された庭園（約3500㎡）が配置されている。宮殿の１階と２階部分が利用された展示室（計420㎡）には、エジプトの先駆的な芸術家や現代陶工の名称が冠されている（図１）。ファーティマー様式やマムルーク様式など、いずれもイスラーム教に関連する意匠の豪華な装飾が施された天井・壁面を背景に、310点余の陶器が展示されている。

展示品はモハンマド・マフムード＝カリールとその妻が蒐集したコレクションが中核である

が、エジプト図書館があるバーグ・アル＝カルク広場のイスラーム芸術博物館より移管されたものなどが加えられて、より充実した内容となっている。

展示品を地理的にみた場合、エジプトはもとより、トルコ、ペルシア、シリア、イラク、モロッコ、アンダルシアなどの作品群が含まれており、時期的にはヒジュラ暦２世紀（西暦８世紀）から同12世紀（西暦17～18世紀）に制作されたもので構成されている。

なかでも、イラクのサマッラ（Samarra）に源流があると推定されるラスター彩陶器は、エジプトのアルフスタット（al-Fustat）やバフナーサ（Bahnasa）などで出土しているが、ペルシアやイラクなどと技術的な関連性や陶工の交流が想定できる興味深いものである。

エジプトではトゥルーン朝時代（西暦868～905年）に、サマッラの陶工イブン・カハルダン（Ibun Khaldan）らの到来により生産が開始されたと推定されるラスター彩の技術は、やがて多彩色のラスター彩陶器へと発展した。

しかし、12世紀中葉の十字軍のカイロ侵攻が直接的な契機となり、ラスター彩陶器の生産は壊滅的な打撃を受け急速に衰退したが、陶工の移住などにより各地に時代を超えて拡散した。フランスの王立製陶所セーブルの製品にみるように、現在の作品に至るまで連綿と大きな技術的影響を与えている。

また、16世紀前葉のオスマン帝国のエジプト侵攻以降に輸入が増加した、イズニック（Iznik）産やキュタフヤ（Kutahiya）産と推定される白地多彩文の一群も、質・量的に特筆できる。このように、当博物館では地理的にも編年的にも体系的なイスラーム陶器の多様性や連続性を理解することができる、優れた作品群を一堂に会した展示が行われている。

以上のように、イスラーム陶器博物館は小規模ではあるが、瀟洒な外観に贅を尽くした室内装飾と展示品とが相俟って、イスラーム芸術の精華の一つである陶器を華麗に引き立てている。作品群は1000年余の年月を越えたイスラーム陶器の比類なき独創性や完成度の高さなどを如実に語りかけている。なお、展示品の詳細については、同博物館のHP（http://www.icm.gov.eg）に詳しい。

**写真２　ラスター彩奏楽人物図皿**
**（エジプト、11世紀、AREMC1998より）**

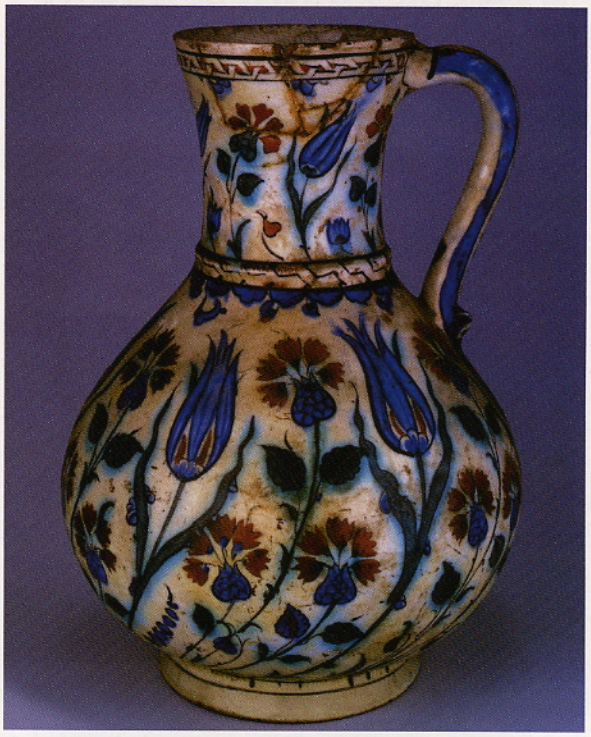

**写真３　白地多彩花文水差**
**（イズニック、17世紀、AREMC1998より）**


【引用参照文献】

1．杉村棟編著、1999、『世界美術大全集』東洋編 第17巻 イスラーム、小学館。

2．小山冨士夫・J. A. ポープ、『東洋陶磁大観』第４巻 イラン国立考古博物館、講談社。

3．Y. Petsopoulos ed. 1989, *Iznik*, Alexandria press, London.

4．Arab Republic of Egypt-Ministry of Culture, 1998, *The Museum of Islamic Ceramics*, Cultural Development Fund.